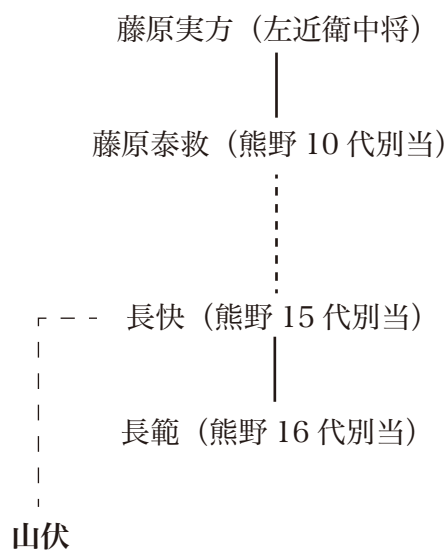
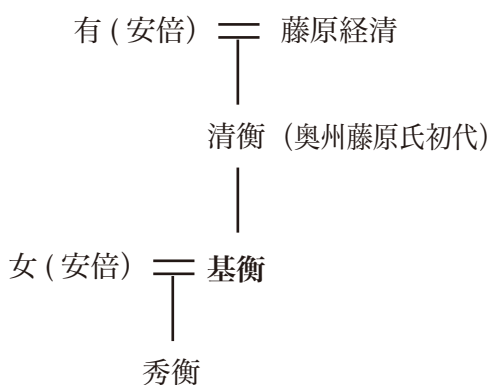
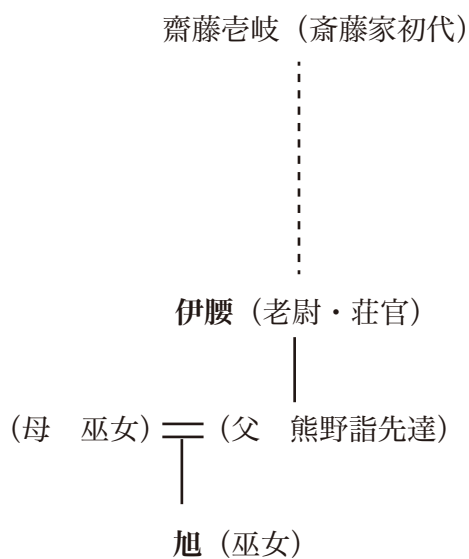
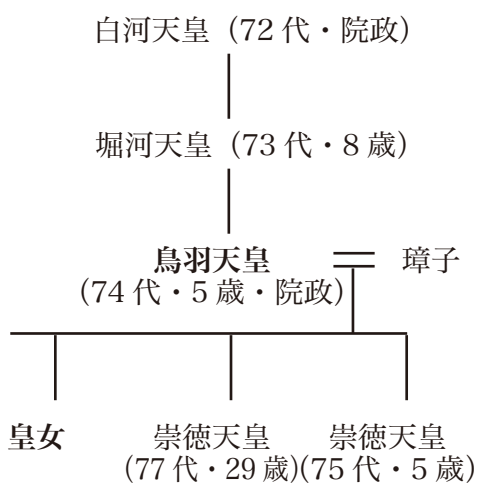


名取少女 旭の奏上



今日も那智の山では風が吹いているせいか、遠く大海原までしっかり見渡すことができる。

旭は大きく背伸びをすると、たたら場を目指して再び駆け始めた。懐には昨夜熊野から届いたばかりの薬とお札があった。まだ静まり返っているたたら場を過ぎると入口にムシロが下がっただけの蝦夷穴（えみしあな）が見えた。勢い良く中に入ると

「せいちゃん！いる？！」と大声を上げた。

「これは旭様・・・」 まず声をあげたのはせいの父親、足が悪く歩けない。

「旭様、こんなに早く・・・」と目の見えないせいの母親。

そして朝餉（あさげ）の支度をしていたらしいせいが奥から飛び出してきた。

「熊野からお薬とお札が届いたの！一刻も早くせいちゃんに渡したくって、駆けてきた！」

大きな瞳でくりっと笑うと懐から小さな麻袋の包みを差し出した。

「こんなに大切なものを私たちのために・・・」

せいは目にいっぱい涙をためている。

「さあ早く！お薬を飲ませてあげて！それからお札はここが良いかしら・・・」

旭は薄暗い穴の中でも一筋の陽があたる場所にお札を供えると一心に祈り始めた。

せいの一家は涙を流しながらこみ上げるものを抑えつつ、旭の祈りを静かに聞いていた。

旭の家は名取川の南、名取郡前田にある。大きな荘園を預る荘官であり、祖父の伊腰は老尉に任じられている。また、斎藤家は代々ご神託を伝える神官の役割も担っていた。旭の父は伊腰の跡を継ぎ、熊野詣の先達として働いていたが、道中不慮の事故で亡くなっていた。また、母も巫女としてこの地に流れてくる民のために献身的に尽くしていたが、流行病（はやりやまい）にかかり亡くなっている。

せいの所から戻ってきた旭は廚（くりや）で遅くなった朝餉を一人で食べていた。

隣の部屋から、昨晚熊野から来た山伏と祖父の伊腰の会話が聞こえてきた。

「伊腰殿、大王（おおきみ）からの仰せじゃぞ！ 受けてくれぬか！」山伏の太い声が響く。

「飛んでいきたいのは山々じゃが、この身体では熊野まではとても行き着けぬ。

かといって旭ではまだ小さい！とてもとても熊野までは・・・」

旭は箸を置くと、勢い良く隣の戸を開け放ち、つかつかと伊腰の前に詰め寄ると膝をついた。

「じい様！旭は困っている人がいるのであれば、どこにでも参ります！！」

と言って頭を下げた。

伊腰は旭の手に一枚の榎（なぎ）の葉を渡すと静かに語り始めた。そこには旭の読めない文字が並んでいた。

『道遠し 年もやうやう老いにけり 思いおこせよ 我も忘れじ』

「実はじいが若かりし頃、大王の病を祓ってさしあげたことがある。それからというもの、大王は熊野への信仰を熱心に続けておられる。我らも信心は欠かさぬが、そなたの父が亡くなってから熊野へは詣でてはおらぬ。大王がそんな我らを心配してこの榊の葉を遣わされたのじゃ。」

「そして聞く所によれば、大王がたいそうかわいがっておられる皇女様がなぞの病にかかっておるそうじゃ。旭！わしの代わりに熊野に行ってくれるか？！」

「はい！」と旭は力のこもった返事をした。

すると山伏は

「それではこれから私は熊野別当様の使いで多賀城まで参ります。用向きが済み次第お迎えに参りますので、それまでにお支度くださいますよう・・・」と言うと足早に出かけていった。

明後日には戻ってくると思われた山伏だったが、一週間を過ぎても現れなかった。

「やっぱり、旭はまだ小さいから無理だと思ったのかなあ・・・」

旭はそれでもどこへも出かけずに山伏が迎えにくるのを待ち続けていた。

すると突然、多くの僧を引き連れて山伏が戻ってきた。実は紀州熊野三山を統括する熊野別当は、名取で亡くなった藤原実方の子孫であり、熊野信仰を熱心に行なっている名取の伊腰達を常に気にかけていた。この度の大王の仰せを聞き、奥州を治める藤原基衡へ力添えをお願いしたのである。基衡は同行者として平泉から僧たちを呼び寄せ、船を用意して熊野まで海の道にて送り届けることにしたのであった。

多くの僧にかしづかれて旭はびっくり！それでもきちんと土間に座り直すと

「道中 よろしく願いいたします。」と頭を下げた。

陸地沿いを進み那珂湊、そして江戸湾よりも広いと言われる内海(霞ヶ浦)を進み、利根川を通過して鎌倉、伊豆、そして紀伊へと船旅は進む。気がつくと熊野権現配下の船団が護衛についていた。

出迎えに出た熊野別当は旭が余りに小さいので驚くが、その物怖じしない態度に感服し、すぐさま熊野詣に来ていた鳥羽天皇と皇女に引き合わせた。

御簾（みす）越しだが大王は直接お言葉をのべられた。

「そなたが都にまで聞こえ及ぶ名取の巫女か？」

「お畏れながら、それは先年亡くなった母のことかと思われまします。」

「それでは今も比丘尼（巫女）たちを束ねているのは伊腰なのか？」

「はい。でも祖父は足腰が自由になりませぬ故、外向きのことは私が代わって奏上しております。」

「ほう！ そなたにも神仏の声が聞こえると申すのじゃな！」

「はい！」と言うと旭は静かに面（おもて）を上げた。

大王の傍らで小さくじっと見つめる瞳を、御簾越しだが旭は見逃さなかった。

「大王！早速祈祷に入りますが、万が一、悪霊が取り憑いていた場合、誰かに乗り移ることがございませば……」

「わかった！ 早速人払いをいたそう！」

まわりに誰もいなくなった事を確認すると、旭はおもむろに御簾の前に祭壇を作り、静かに祈り始めた。長い祈りのあと、急に旭はひれ伏したまま動かなくなった。

皇女は自分と同じ年くらいの巫女が必死に祈る姿をしばらくは物珍しそうに眺めていたが、急にパタッと動かなくなったので心配になってきた。

「これ、いきておるのか？」

「はい、旭は生きております。」

「旭とやら、それならなぜ動かぬ？」

「はい、こうしていれば皇女様とお話しができるからです。」

「わらわと話とな？」

「はい！そうです。皇女様と楽しい話をするところこそ、この旭の祈祷です！」

「おもしろい！どのような楽しい話、いや祈祷をしてくれるというのじゃ？」

この後、旭はひれ伏したまま日の暮れるまで楽しい祈祷を続けた。

旭の祈祷は次の日もその次の日も鳥羽天皇が都に帰るという日まで続いた。

長い時間、ひれ伏したまま、時折小刻みに肩を震わす姿は、遠目からは実に摩訶不思議な祈祷に見えた。

そして明日は都へ立つという夕暮れ……

「旭、実に靈驗あらたかな祈祷であった。名残惜しいが、わらわも明日は父君と共に都に帰らねばならぬ。父君から褒美はと問われたら遠慮なく申せよ！」

「はい！」と静かに面を上げると、その大きな瞳には皇女の姿が映っていた。

すっかり回復なされた皇女に鳥羽天皇は大層感激され、恩賞として何が欲しいかを尋ねられた。

「はい。紀州熊野はあまりにも遠いため、祖父伊腰はもう参拝はかないませぬ。

また奥州には紀州熊野詣をしたくともできない民が大勢います。

かなうことなら紀州熊野三社の御分霊を名取の地に勧請できますればと願っております。」

と、奏上した。鳥羽天皇は旭の願いに感涙し、勅命により御分霊を名取の地に勧請することを許されたのである。

紀州熊野三社から御分霊とご神体を賜った旭は万が一にも嵐に遭うことを恐れ、馬にて奥州まで戻っていくことにした。習わしによりご神体の遷御は日中を避けて夜に行なわれる。道中は真っ暗になり、道に迷うこともしばしばであった。

その度に旭は漆黒の空に祈りを捧げる。するとどこからともなく熊野権現の使いとされる大きなカラス（八咫鳥）が現れて、先導してくれるのであった。

無事、奥州名取の地にご神体が到着するのを見届けると、その大きなカラスは息絶えた。伊腰は鳥の宮を建ててこのカラスを祀ったと言われている。

奥州を治める藤原基衡は早速名取川の南側にある飛鳥丘に社殿を建立することにした。紀州熊野と同じようにとの伊腰の願いにて新宮社の北西に熊野本宮社、南西に熊野那智神社を配置した。

その後、名取熊野三山は奥州鎮護の神様として祀られ、18の宿坊を有するまでになり、多くの参拝客が訪れるようになっていた。

那智神社の境内に馬に乗った伊腰と手綱を引く旭の姿があった。相変わらず風が強い。風によって近くのたたら場で働く男たちの声も聞こえる。

「旭よ、皇女様にお会いした時、本当はそなたには何が見えたのじゃ？」

「はい。かか様の笑顔が見えました。」

「かかの顔じゃと？」

「はい、ですから昔、かか様から教えてもらった話をたくさんお話ししました。」

「そうか・・・皇女様も母君の璋子（たまこ）様のことを思い出されておられたかもしれぬ。」

風は止むことなく、韃（ふいご）の様に那智の丘を駆け抜けている。

おしまい